

住居志向からみた子どもの住空間認識の発達[†]

—— 第1報 住空間に対する重視の傾向 ——

中 島 喜代子 *

The Development of Children's Recognition of Dwelling House Judging from Children's Intention of It

Part I, Children's Serious Consideration of Dwelling House

Kiyoko NAKAJIMA

SYNOPSIS

The purpose of this study is to grasp the children's recognition and directional intention of dwelling house and home life, and to make it useful materials for their education of housing.

In this paper, the children (primary school children, junior high school students and senior high school students) and their mothers have been inquired of their estimation and consideration of dwelling house in which they are supposed to live.

The following results were obtained.

- 1) Children can judge of dwelling house in which they are supposed to live as they grow older.
- 2) The relation between mothers' estimation of dwelling house in which they are supposed to live and children's one becomes closer as they grow older.
- 3) Mothers estimate their dwelling house lower than children do. And mothers put importance on dwelling house than children.
- 4) Using the method of Factor Analysis, it has been found that the structure of mothers' estimation of dwelling house in which they are supposed to live resembles senior high school students' one, but does not resemble junior high school students' one.
- 5) Children's demands for possession of the furnitures is stronger than mothers' ones. In case of boys, the relation between mothers' demands for possession of the furnitures and children's ones becomes closer as they grow older. But in case of girls, this tendency is not seen. It is because of girls' demands for possession of furnitures without consideration for their dwelling house.

1. 緒論

本研究は、住空間や住生活に対して子どもがもつ志向が、子どもの成長とともにどのように変化するかをとらえることにより、子どもの住空間認識発達の様相について明らかにし、今後の住教育に役立て

ることを目的としている。

まず、本報では、住空間の諸側面に対する重視度について、その判断可能率を子どもの年齢段階別に検討する。また、重視する空間の傾向についても子どもの年齢段階別に母親のそれとの関連を検討するとともに、住空間重視の構造をとらえるため因子分

† 原稿受理日 昭和61年10月15日

* 三重大学教育学部

析をおこなう。さらに、家具所有要求についても同様に検討を加える。

2. 調査方法

三重県伊勢市内の小学5・6年生、中学2年生、高校2年生の児童・生徒とその母親を対象に、昭和59年7月～8月にかけて、間接配布留置式の調査を実施した結果、表1に示す655件の有効サンプルを得た。調査対象の概要は、表2に示すように、平均家族人数約5人、住宅の部屋数は6室にピークがあり、約7割が専用住宅で、一戸建および持家の割合は約9割であった。また、住宅の状況は子どもの年齢段階によって差がみられた。

表1. 有効サンプル数

学年	性別	男子	女子	計
		件数 (%)	件数 (%)	件数 (%)
小学校5・6年生		121(38.5)	132(38.7)	253(38.6)
中学校 2年生		73(23.3)	103(30.2)	176(26.9)
高 校 2年生		120(38.2)	106(31.1)	226(34.5)
計		314(100.0)	341(100.0)	655(100.0)

表2. 調査対象の概要

家族人数	件数	(%)	住宅形式	件数	(%)
2人	2	(0.6)	一戸建て	563	(93.8)
3	48	(8.1)	連続建て	9	(1.5)
4	195	(32.8)	共同建て	26	(4.3)
5	198	(33.3)	間借り	2	(0.3)
6	102	(17.2)	不 明	55	—
7	45	(7.6)	計	655	(100.0)
8	4	(0.7)			
不 明	61	—	所有関係	件数	(%)
計	655	(100.0)	持 家	488	(87.3)
			民営借家	39	(7.0)
			公的借家	16	(2.9)
			給与住宅	16	(2.9)
			不 明	96	—
			計	655	(100.0)
			住宅様式	件数	(%)
部屋数	件数	(%)	専用住宅	434	(72.7)
3室以下	57	(9.7)	店舗・工場併用住宅	111	(18.6)
4室	70	(11.9)	農家・漁家	42	(7.0)
5	109	(18.6)	その他	10	(1.7)
6	126	(21.5)	不 明	58	—
7	75	(12.8)	計	655	(100.0)
8	67	(11.4)			
9	33	(5.6)			
10室以上	49	(8.4)			
不 明	69	—			
計	655	(100.0)			

3. 調査結果および考察

1) 住空間に対する子どもの重視度

子どもが住空間のどのような側面を重視するかについて明らかにするため、新しく家を建てたり、買ったりするとしたらどのような点を重視するかを知ることによってとらえようとした。調査に用いた項目は、表3に示す〈住宅の全体的広さ〉〈各部分空間の広さ〉〈家具関係〉〈自然環境条件〉〈平面プラン〉〈視覚的デザイン〉〈設備空間の機能性〉〈地域施設〉〈住宅の安全性〉〈住宅の全体的側面〉等の《項目分類》別の計28項目である。それらを、《項目の性格》の側面から、住宅の広さや自然環境条件、地域の施設状況等〈空間の実態的側面〉、主に空間の使い方や空間のつながり方に関わる家具や平面プラン等〈空間の機能性に関する側面〉、視覚的デザインに関わる〈美的感覚に関する側面〉、災害や盗難等のアクシデントに関わる〈非日常的側面〉、直接住生活と関わりのない部分の一側面である「住宅の財産としての価値」をとりあげた〈社会的価値の側面〉に分け、また《空間の広がり》の側面から、〈各部分空間（公的空間、私的空間、収納空間、設備空間、外部空間）〉、〈住宅全体〉、〈地域空間〉に分類して設定した。この28項目を、〈特に重視する〉〈重視する〉〈さほど重視しない〉〈わからない〉の категорияに分けて調査した（重視度については、小学生が答えるのは困難であると考え、中・高校生のみを対象とし、〈特に重視する〉と回答する個数は28項目中5個までに限定した）。

a. 住空間に対する子どもの重視度判断の傾向

表3に示した28項目について、何らかの判断を示したものを住空間の重視度について判断可能なものと考え、〈わからない〉と答えたものを、判断できないものとした。

図1に、中・高校生全体について、住空間に対する重視度の判断が可能なものの割合（以後、「重視度判断率」と記す）を示す。各項目に対する「重視度判断率」は、76%から90%の間に分布し、28項目中25項目が80%台を示す。この中で、「13、住宅全体の間取り」と「28、住宅の財産としての価値」は、やや低い値を示しており、子どもにとって認識や理解が困難な側面であるといえる。

次に、年齢段階別、男女別の「重視度判断率」を、図2に示し、これを検討する。28項目すべてについて、中学生よりも高校生の「重視度判断率」の方が20%程度高い（全項目とも順位相関係数は、危険率

表3. 調査に用いた住評価項目の分類

項目分類	項目	項目の性格	空間の広がり
住宅の全体的広さ	1. 部屋の数 2. 住戸面積 (住宅全体の広さ)	空間の実態的側面	住宅全体
各部分空間の広さ	3. 居間の広さ 4. 食事室の広さ 5. 台所の広さ 6. 個室・寝室の広さ 7. 押入・納戸・物入れなどの広さ 8. 庭の広さ	空間の実態的側面	家族共用空間 設備空間 私的空間 収納空間 外部空間
家見関係	9. 家具の数量 10. 家具の配置	空間の機能性に関する側面	住宅全体
自然環境条件	11. 日照, 採光, 通風 12. 周辺自然环境	空間の実態的側面	住宅全体 地域空間
平面プラン	13. 住宅全体の間取り 14. L・D・K (居間, 食堂, 台所) のつながり 15. 個室・寝室の独立性 16. 押入・納戸・物入れなどの位置 17. 台所・風呂・便所の位置	空間の機能性に関する側面	住宅全体 家族共用空間 私的空間 収納空間 設備空間
視覚的デザイン	18. 住宅の外観デザイン 19. 室内のインテリアデザイン	美的感覚に関する側面	住宅全体
設備空間の機能性	20. 台所, 風呂, 便所の設備 21. 台所まわりの使いよさ	空間の機能性に関する側面	設備空間
地域施設	22. 公共施設 (学校・病院など) 23. 商業的施設 (スーパー, 映画館など) 24. 交通の便利さ (通勤, 通学)	空間の実態的側面	地域空間
住宅の安全性	25. 災害時の安全性 (火事や地震) 26. 防犯性能	非日常的側面	住宅全体
住宅の全体的評価	27. 住宅の老朽度 (家の古さ) 28. 住宅の財産としての価値	住宅の実態的側面 社会的価値の側面	住宅全体

1%で有意)。中学生段階では28項目すべてが80%以下の割合であるが、高校生段階ではすべての項目が80%以上で、そのうち26項目が90%以上を示しており、子どもの成長による認識の発達が非常に大きい。

「重視度判断率」についての男女による差異をみると、高校生段階において「台所の広さ」や「台所まわりの使いよさ」など、台所関係の項目では女子の方が高く、中学生段階では「災害時の安全性」や「防犯性能」などの〈非日常的側面〉および「住宅の財産としての価値」項目にみられる〈社会的価値の側面〉では男子の方が高く、認識発達に違いがみられる。

b. 住空間に対する子どもの重視度
住空間に対する重視度について、〈わからない〉と

答えたものを除き、〈特に重視する〉〈重視する〉〈さほど重視しない〉の категорияによる子どもと母親別の割合を、図3に示す。

中・高校生全体で重視する傾向が強い項目は、〈自然環境条件〉〈住宅全体の広さ〉〈住宅の安全性〉等と「交通の便利さ」「庭の広さ」「個室・寝室の広さ」などの住宅の基本的機能の部分や自分との関連の強い部分にみられる。逆に、〈家具関係〉〈住宅の全体的側面〉の項目や「押入、納戸、物入れの広さ」「押入、納戸、物入れの位置」などの収納空間関係の項目は重視されていない。

子どもの年齢段階にみると、28項目中22項目について高校生の方が重視する傾向がみられ (順位相関係数が危険率5%で有意の項目)、〈さほど重視しな

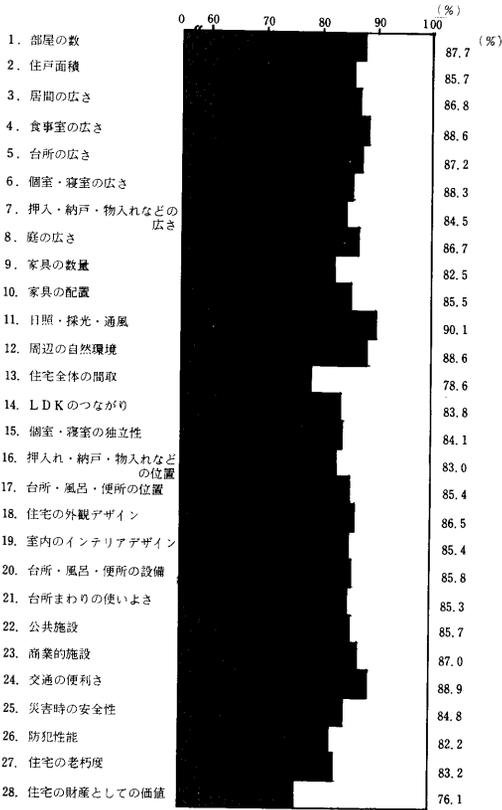


図1 住空間に対する子どもの重視度判断率（全体）

い) 割合は全項目について中学生の方が多い。5個までと限定した〈特に重視する〉割合をみると、〈住宅の広さ〉および「個室・寝室の広さ」「個室・寝室の独立性」など個室関係の項目や「庭の広さ」等の自分との関係の強い部分については中学生の方に多く、「住宅全体の間取り」〈地域施設〉〈自然環境条件〉〈住宅の安全性〉などの項目は高校生の方に多くなっている。すなわち、高校生になると自分と関係の強い身近な部分や認識・理解の容易な側面から、住宅全体あるいは地域空間さらには住み方や空間の使い方に対する理解が必要となる〈空間の機能性に関する側面〉にまで関心が広がるといえる。

男女別に重視度の違いをみると、女子の方が重視傾向が強い項目は、高校生段階において、台所空間や家具、平面プランなど住空間の使い方や家事労働に関するものにみられる。一方、男子の方が重視傾向の強い項目は、中学生段階および高校生段階において、空間の広さや個室空間、〈社会的価値の側面〉に関するものにみられる。

次に、母親と子どもの重視度の差異についてみると、〈さほど重視しない〉割合は、ほとんどの項目について子どもの方に多く、全体的に住宅に対する関心は親の方が強いといえる。〈特に重視する〉割合をみると、「台所の広さ」「台所まわりの使いよさ」などの台所空間や「押入、納戸、物入れなどの広さ」

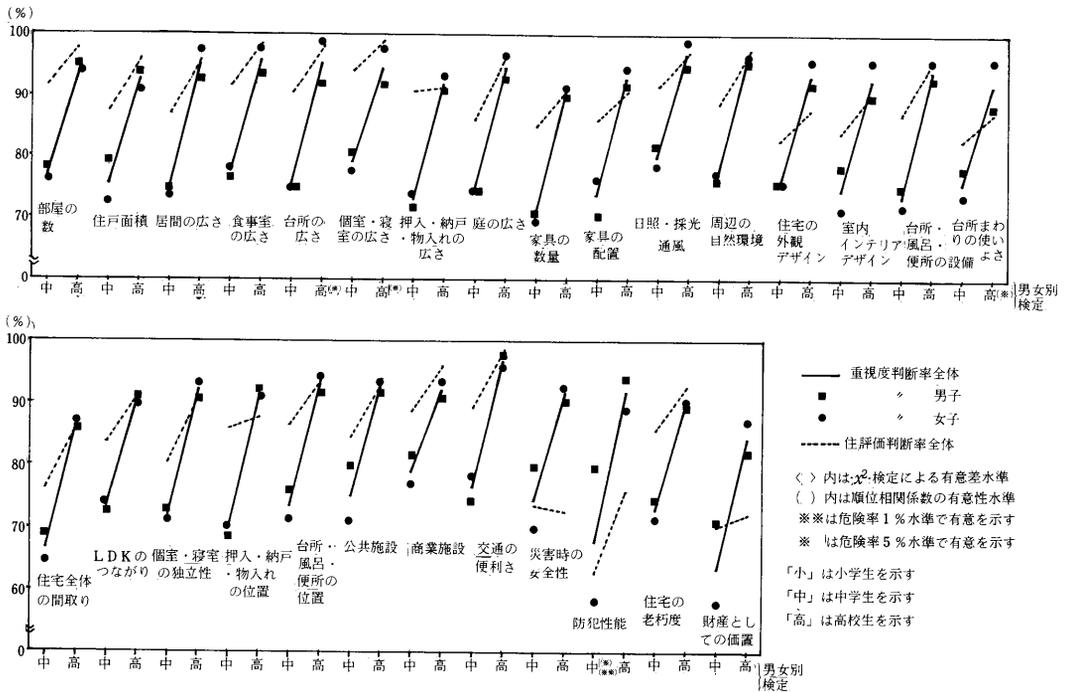


図2 年齢段階別、男女別「重視度判断率」

住居志向からみた子どもの住空間認識の発達

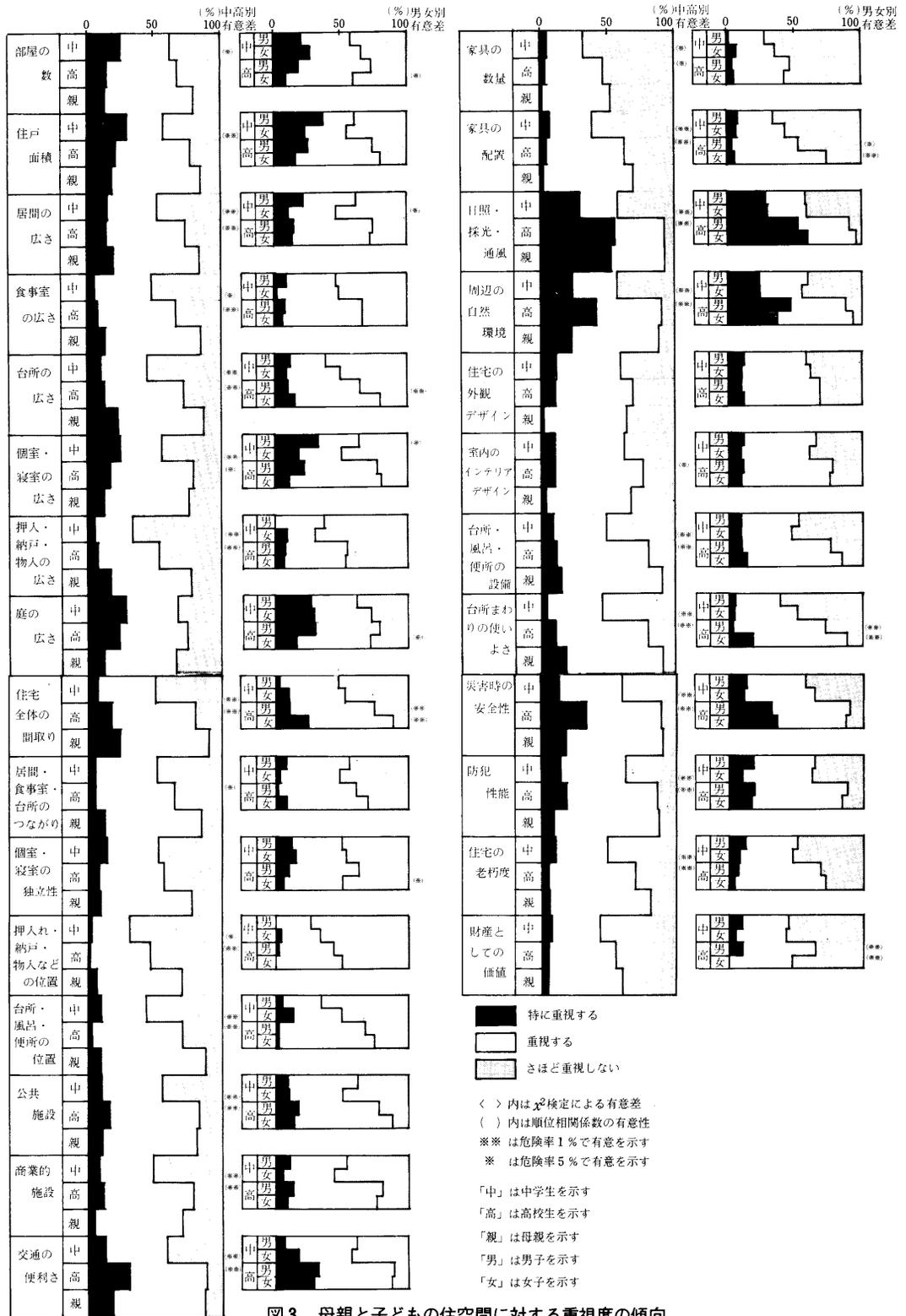


図3 母親と子どもの住空間に対する重視度の傾向

「押入、納戸、物入れなどの位置」等の収納空間、および「住宅全体の間取り」「居間・食事室・台所のつながり」等の〈平面プラン〉については、特に親の重視傾向が顕著であるが、「個室、寝室の広さ」「庭の広さ」および〈視覚デザイン〉関係の項目では子どもの重視傾向が強い。すなわち、一般的に住宅に対する関心は親の方が強いが、自分との関連の強い部分と現実的実用性とは遠い〈美的感覚に関する側面〉については、子どもの関心の方が強いといえよう。

また、中学生、高校生、母親と順次重視傾向が強くなる項目が大半であり、子どもの成長とともに母親の志向に近づき、住宅に対する関心も強くなるといえよう。

C. 住空間に対する重視志向の構造

子どもの住空間に対する重視志向の構造とその特徴をとらえるため、母親と中・高校生別に〈特に重視する〉〈重視する〉〈さほど重視しない〉のカテゴリ分類尺度で因子分析をおこなった¹⁾。その結果を表4に示し(因子負荷量0.4以上の変数について示

表4. 因子分析の結果

(中学生)			(高校生)			(母親)			
FACTOR	変数	因子負荷量	FACTOR	変数	因子負荷量	FACTOR	変数	因子負荷量	
1 (55.1)	防犯性能	0.79	1 (34.4)	食事室の広さ	0.74	1	公共施設	0.74	
	災害時の安全	0.75		台所の広さ	0.73		交通の便り	0.67	
	周辺の自然環境	0.73		居間の広さ	0.55		商業的施設	0.57	
	交通の便り	0.62		押入、納戸、物入の広さ	0.40		防犯性能	0.54	
	日照、採光、通風	0.56	2	住宅の外観デザイン	0.70		(48.9)	災害時の安全性	0.51
	商業的施設	0.44		室内のインテリアデザイン	0.58	2	日照、採光、通風	0.66	
	台所、風呂、便所の設備	0.40		LDKのつながり	0.55		住宅全体の間取	0.50	
2 (12.2)	食事室の広さ	0.79	財産としての価値	0.44	(11.9)		台所まわりの使いよさ	0.42	
	台所の広さ	0.78	3	商業的施設	0.83	3	周辺の自然環境	0.40	
	台所まわりの使いよさ	0.55		公共施設	0.66		室内のインテリアデザイン	0.73	
	居間の広さ	0.51	(12.0)	交通の便り	0.64		住宅の外観デザイン	0.71	
	台所、風呂、便所の設備	0.48	4	4 (9.3)	押入、納戸、物入の位置	0.68	(11.1)	財産としての価値	0.41
3 (10.4)	押入、納戸、物入の位置	0.77			押入、納戸、物入の広さ	0.59	4	食事室の広さ	0.81
	押入、納戸、物入の広さ	0.65			家具の配置	0.46		(7.7)	台所の広さ
	家具の数量	0.54	5	日照、採光、通風	0.72	5		居間の広さ	0.44
	家具の配置	0.51		(8.0)	周辺の自然環境		0.65	住戸面積	0.61
	台所、風呂、便所の位置	0.42	6	6 (6.0)	防犯性能	0.89	(6.7)	部屋の数	0.58
日照、採光、通風	0.42	災害時の安全性			0.66	6	押入、納戸、物入の広さ	0.77	
4 (7.5)	住宅の外観デザイン	0.69	7	7 (5.3)	住戸面積		0.65	(5.3)	押入、納戸、物入の位置
	室内のインテリアデザイン	0.65			部屋の数	0.55	7	台所、風呂、便所の位置	0.76
	住戸面積	0.50	8 (4.6)	8	庭の広さ	-0.50		(4.5)	台所、風呂、便所の設備
	財産としての価値	0.43			9 (3.8)	9	台所、風呂、便所の位置	0.46	(4.0)
庭の広さ	0.40	個室、寝室の広さ	-0.42						
5 (5.5)	個室、寝室の広さ	0.72							
	個室、寝室の独立性	0.70							
	部屋の数	0.62							
6 (5.2)	商業的施設	0.59							
	公共施設	0.54							
	家具配置	0.44							
7 (4.1)	住宅の老朽度	0.72							
	財産としての価値	0.43							

注 () 内の数字は寄与率を示す
因子負荷量0.40以上の変数を示した

す)、各因子の性格のまとめを表5に示す。

母親では、第1因子(地域施設と住宅の安全性)の寄与率は48.9%と大きく、第3因子までで約70%の説明率をもつ。また、因子はほぼ《項目分類》もしくは空間の種類によって分離している。

一方、高校生では第1因子(各部分空間の広さ)の寄与率は34.4%と母親より低く、因子の性格も異なっている。しかし、高校生の第1因子と母親の第4因子など因子の構成はほぼ対応している。

中学生では、第1因子の寄与率は55.1%と高く、因子の性格も〈住宅の安全性〉と〈自然環境条件〉〈地域施設〉を含んだ複合した性格をもった因子となっている。このように、多くの因子は含まれる変数が多く複合した性格をもつとともに、「個室関係因

表5 因子分析結果のまとめ

FACTOR	中 学 生	高 校 生	母 親
1	住宅の安全性、自然環境条件、地域施設	各部分空間の広さ	地域施設、住宅の安全性
2	各部分空間の広さ、台所	視覚デザイン	自然環境条件
3	収納空間、家具	地域施設	視覚デザイン
4	視覚デザイン、住宅全体の広さ	収納空間、家具	各部分空間の広さ
5	個室空間、住宅全体の広さ	自然環境条件	住宅全体の広さ
6	地域施設	住宅の安全性	収納空間
7	住宅の全体的評価	住宅全体の広さ	設備空間
8		庭の広さ	住宅の老朽度
9		設備空間	

表6 母親と子どもとの家具所有要求における順位相関係数

家具	対象	全 体	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
			全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子
居間・接客室用家具	座 敷 机	0.084*	0.061	0.083	0.052	0.097	0.165	0.064	0.092	0.179*	0.051
	ロッキングチェア	0.045	0.153*	0.305**	0.066	0.076	-0.095	-0.047	0.024	-0.001	0.059
	応 接 セ ッ ト	0.275**	0.291**	0.148	0.383**	0.248**	0.194	0.285**	0.263**	0.280**	0.226*
	ス テ レ オ	0.212**	0.145*	-0.029	0.252**	0.241**	0.249*	0.226*	0.274**	0.196*	0.369**
	テ レ ビ	0.131**	0.123*	0.188*	0.040	0.109	-0.030	0.211*	0.199**	0.285**	-0.029
	ピ ア ノ	0.165**	0.08	-0.023	0.083	0.237**	-	0.271**	0.261**	0.222*	0.313**
サ イ ド ボ ー ド	0.073*	-0.012	0.021	-0.054	0.041	0.040	0.048	0.222**	0.212*	0.235**	
台室所用・食家具	食 卓	0.269**	0.244**	0.147	0.327**	0.403**	0.269*	0.496**	0.184**	0.332**	0.021
	食卓用イス	0.214**	0.194**	0.142	0.224**	0.285**	0.106	0.401**	0.163**	0.374**	-0.084
	食 器 棚	0.134**	-0.011	0.014	-0.049	0.193**	0.156	0.220*	0.298**	0.298**	0.300**
	ワ ゴ ン	0.159**	0.107	0.110	0.118	0.190**	0.306**	0.124	0.166**	0.343**	0.004

**は危険率1%で有意を示す

*は危険率5%で有意を示す

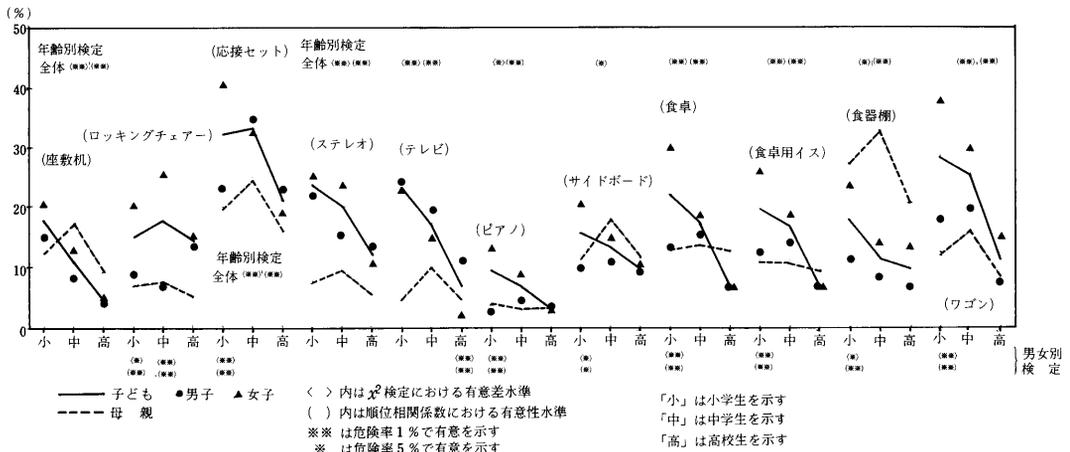


図4 母親と子どもとの家具所有要求率

子」が抽出されるなど高校生や母親とは違いがみられる。

2) 家具所有に対する子どもの要求

各家庭において家具所有実態には差異があると考えられるため、母親の家具所有要求との比較を通して、子どもの家具所有要求の傾向を分析する(以後、「家具所有要求」を〈家具要求〉と記す)。

a. 各家具に対する所有要求の傾向

表6に示す〈居間・接客室用家具〉と〈台所・食事室用家具〉について、子どもの年齢段階別に、母親と子どもの所有要求率を図4に示し、表6には母親と子どもの〈家具要求〉の順位相関係数を示す。

〈家具要求率〉は、対象全体でみると一般的に子供の要求率の方が高いが、「食器棚」と「サイドボード」等の食生活用収納家具では母親の方が高くなっている。これは、母親の場合、住空間の現実を踏まえた要求であるのに対して、子どもは住空間条件を深く考えずに要求することによるといえよう。

子どもの年齢段階別に〈家具要求率〉をみると、「ロッキングチェア」を除く全家具において、子どもの成長とともに要求率が低下する傾向がみられる。一方、母親では子どもが中学生の場合に要求率が一番高くなる家具が11家具中7家具と多く、子どもの場合と違いがみられる。

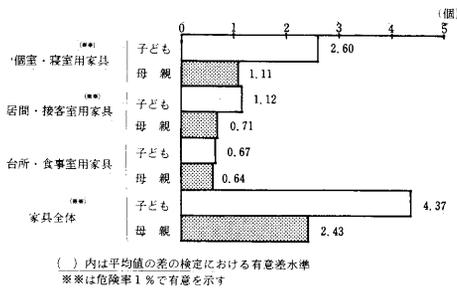


図5 母親と子どもの平均家具要求個数 (全体)

子どもの〈家具要求〉を性別にみると、11家具中8家具は、小学生段階で男女に有意差があり、女子の要求率の方が高くなっている。しかし、高校生段階では全般的に男女差がなくなる傾向がみられ、成長とともに男女差が少なくなるといえる。ただし、「テレビ」については、年齢とともに男子の要求率の方が多くなっている。

次に、母親と子どもの〈家具要求〉の有無についての順位相関係数をみると、対象全体では「ロッキングチェア」を除き、関連に有意性がみられる。子どもの年齢別にみると、高校生では、ほとんどの家具について有意性がみられるが、小学生では〈居間・接客室用家具〉〈台所・食事室用家具〉に有意性のないものが、それぞれ約半数みられる。中学生でも〈台所・食事室用家具〉にはすべて有意性がみられるが、〈居間・接客室用家具〉に有意性のないものが約半数みられる。このように、〈家具要求〉におい

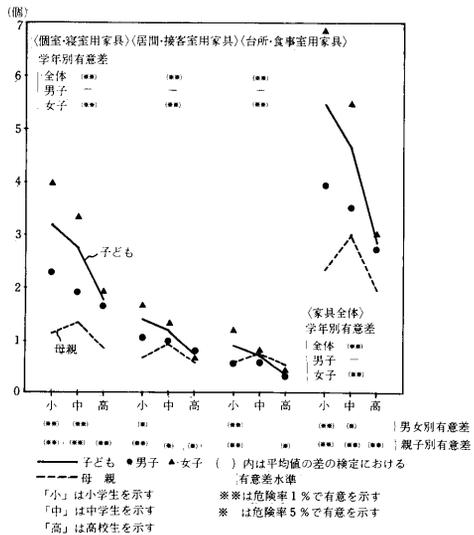


図6 母親と子どもの平均家具要求個数 (年齢段階別)

表7 母親と子どもの家具要求個数における相関係数

家具の種類	対象	全体	小学生			中学生			高校生		
			全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
家具全体		0.188**	0.094	0.155	0.035	0.150	0.194	0.122	0.353**	0.475**	0.078
個・寝室用家具		0.161**	0.121	0.087	0.139	0.068	0.154	0.013	0.287**	0.359**	0.137
居間・接客室用家具		0.211**	0.118	0.230*	0.021	0.196*	0.119	0.232*	0.363**	0.506**	0.123
台所・食事室用家具		0.187**	0.075	0.102	0.046	0.225**	0.103	0.294**	0.315**	0.481**	0.077

**は危険率1%で有意を示す
*は危険率5%で有意を示す

ても子どもの成長とともに母親の志向に近づく傾向が認められる。

b. 〈家具要求〉個数の傾向

〈家具要求〉個数について、〈個室・寝室用家具〉(「勉強机」「本箱・本棚」「洋服ダンス」「整理ダンス」「ファンシーケース」「ロッカー」「鏡台」「ベッド」「テーブル」「ステレオ」「テレビ」「オルガン」「ピアノ」「ミシン」をとりあげ、子どもは「子どもべや」、母親は「個室・寝室」にはほしい家具として問うている)、〈居間・接客室用家具〉(〈台所・食事室用家具〉)とすべてを合計した〈家具全体〉についての、母親と子どもの平均〈家具要求〉個数を図5に示し、同様に子どもの年齢段階別について図6に示す。また、母親と子どもの〈家具要求〉個数についての相関係数を表7に示す。

対象全体では、〈個室・寝室用家具〉(〈居間・接客室用家具〉)〈家具全体〉の平均〈家具要求〉個数において、母親より子どもの方が多く、有意差がみられる。しかし、〈台所・食事室用家具〉については母と子で差はない。

子どもの年齢段階別に〈家具要求〉個数の違いをみると、男女ともに成長に従って要求個数は減少しているが、男子では年齢段階による大きな差はなく、学年による有意差はみられないのに対し、女子の場合減少傾向が著しく有意差がみられる。男女別に〈家具要求〉個数の違いをみると、全体的に女子の要求個数の方が多いが、小学生段階で男女差が大きく、各種家具とも小学生段階で有意差があり、女子の方が多い。中学生でも、〈個室・寝室用家具〉(〈家具全体〉)では男女間に有意差があり、子どもの成長とともに男女差は小さくなる傾向がある。

母親と子どもの〈家具要求〉個数についての相関係数は、高校生では全種類の家具について有意性がみられるが、中学生では〈居間・接客室用家具〉(〈台所・食事室用家具〉)のみに有意性がみられ、小学生ではすべてに有意性がみられない。すなわち、子どもの成長とともに母親の志向に近づいているといえよう。しかし、男女別にみると、男子では高校生段階で母親の志向との関連が強く、上記の傾向を示すが、女子では高校生段階ですべてに有意性がみられず、〈家具要求〉においては女子の場合、現実の住宅条件を踏まえ要求を出す傾向が強いといえよう。

4. 結語

中・高校生とその母親を対象として、子どもが重視する空間についてどの程度の判断力をもっている

か、また重視する住空間の内容が母親と比べてどのような差異があるかを検討し、さらに小・中・高校生とその母親について家具所有要求の傾向を検討して、子どもの住空間認識の発達について分析した。その結果、以下の知見を得た。

1) 住空間に対する「重視度判断率」は中学生と高校生で約20%の開きがあり、高校生段階での住空間に対する認識の発達は顕著である。また、性別にみると台所関係の「重視度判断率」は女子の方が高く、〈非日常的側面〉や〈社会的価値の側面〉については男子の方が高いのが特徴である。

2) 子どもが重視する空間の側面をみると、自然環境条件や住宅の安全性、住空間の広さなどの住宅の基本的機能や子ども本人との関連の強い側面を重視しており、家具や収納空間などに対しては軽視する傾向がある。

学年による傾向をみると、くさほど重視しない割合は、全項目において高校生よりも中学生に多く、全般的に高校生の方が住空間を重視する傾向がある。〈特に重視する〉割合は子どもの生活に密着し、認知が容易な事柄については中学生で多く、対象領域が地域に広がったり、非日常的側面あるいは空間の機能性に関する側面については高校生の方が多い傾向がみられる。

男女差をみると、家事に関する空間や家具、平面プランについては女子の方が重視する傾向があり、住空間の広さや個室関係の項目および財産としての価値に対しては男子の方が重視する傾向がある。

3) 母親と子どもの住空間に対する重視傾向の差異をみると、ほとんどの項目について母親の方が重視する傾向が強いが、台所空間、収納空間、設備空間、平面プランについては特に顕著である。また、子どもの成長にしたがって母親の志向に近づき、住空間に対する認識が発達するとともに、住空間に対する関心や興味が広がることが明らかになった。

4) 住空間に対する重視志向の構造をとらえるため因子分析を行った結果、母親と高校生では因子の構造が類似である。しかし、中学生では多数の変数が関連をもち、母親や高校生とは異なった因子の分かれ方をしており、住空間に対する重視志向の構造に違いがみられる。すなわち、中学生では住空間に対する認知が未分化であるのに対し、高校生になると住空間に対する認知が分化してくるといえる。

5) 家具所有要求では、母親の要求率よりも子どもの要求率の方が高い家具が一般的であり、要求個数でも子どもの方が多い。すなわち、家具所有要求は

現実の住空間の制約を受けるため、住空間に対する重視度の場合と逆の傾向になっている。また、要求率、要求個数ともに子どもの成長にしたがって低下しており、母親と子どもの家具所有要求に対する相関は、子供の成長とともに強くなる傾向が認められる。すなわち、より現実を踏まえた要求に近づき、住空間認識は発達するといえる。

6)家具所有要求を性別にみると、全体的に要求率、要求個数ともに女子の要求の方が強いが、年齢とともにその差が小さくなる。また、母親の要求との相関は男子より弱い傾向がみられる。すなわち、家具所有要求に対して、子どもは現実の住宅条件を踏まえずに志向する傾向が強く、特に女子にその傾向が強いといえる。

注

- 1) 因子分析の因子抽出法は、共通性の反復推定主因子解を用い、因子数は1.0以上の固有値をもつ因子とし、共通推定値間の差が0.001以下となるまで計算を繰り返すこととした。因子の回転は、バリマックス回転を用いた。